



アメリカ英語の発音（リスニングがスリリング）

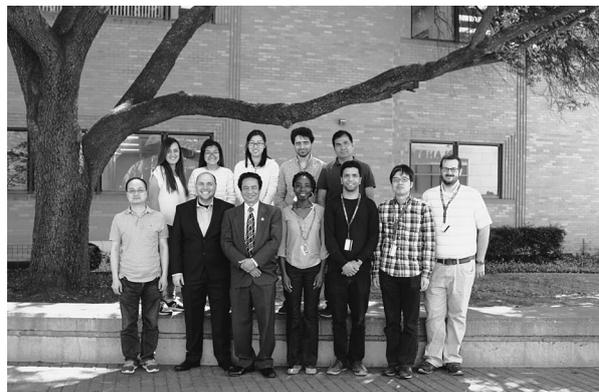
日本大学大学院理工学研究科の南澤宏瑚君からバトンを受けました日本大学理工学部の吉川賢治と申します。所属を見て不思議に思った方も多いと思いますが、実は昨年度まで南澤君とは同じ研究室（しかも同じ部屋）に所属していたため、このリレーエッセイ始まって以来、最短距離のリレーではないでしょうか。現在はお互いに異なる研究室に在籍していますが、同じフロアに在籍するため、数秒歩けばお互いの部屋を行き来することが可能です。

さて、このエッセイを執筆している2017年5月中旬現在、私は Visiting Scholar としてテキサス大学アーリントン校（UTA）の Dasgupta 研究室に在籍しています（Dasgupta 教授は、機関誌ぶんせき 2015年8月号の360頁に紹介されています）。ちなみに、Dasgupta 研究室には歴代で何人も日本人研究者が在籍しており、このリレーエッセイの歴代執筆者の中にも何名かいらっしゃいます。

私が UTA に来たのが2016年8月中旬であり、早いもので1年の出張期間の4分の3が過ぎました。実はここに来るまでは海外旅行を含めて海外経験が全くなく、最北端で北海道、最南端で福岡（何れも日本分析化学会の学会関連）と、まさに「井の中の蛙大海を知らず」でした。この段階で国際学会には1度しか参加したことがなく（しかも日本で開催）、英会話のスキルが不安であったため、ネイティブ表現を少しでも身に着けるべく、出国直前まで英会話教室に通い、さらに出張先がアメリカであったため、なるべくアメリカ人講師にあたるようにスケジュールを組んでいました。ちなみに、このエッセイのサブタイトルであるスリリングは、恐怖というより、ハラハラ、ドキドキするという意味合いです。

英会話教室でも感じたことですが、アメリカ英語の印象を一言で言うと「表現はシンプルながら早口」でしょうか。滞在初期は特にリスニングに苦戦し、何度となく「もう少しゆっくりしゃべってくれませんか。」とお願いしていました。また、アメリカでは当たり前のルールですが、日本と異なる発音にもだいぶ苦労しました。私自身、学生時代からイオンクロマトグラフィー（IC）に関する研究をメインで行っていますが、アメリカ英語の発音をカタカナ表記すると「アイオンクロマトグラフィー」です。同じように陽イオンは「カタイオン」、陰イオンは「アナイオン」になります。このあたりは前出の国際学会で経験したので何とかできました。

もう少し奥の深い発音のエピソードを挙げると、この滞在中に携わったアミノ酸分析での一コマでしょうか。アミノ酸分析に携わった方であれば何でもないと思いますが、ここにも日本人にとってはいくつか戸惑う発音がありました。例えば、最も簡単な構造のアミノ酸はグリシンですが、「グライシン（かつてそんな名前のプロ野球選手がいたような気が…）」、メチオニンが「メサイオニン」、チロシンが「タイロシン」とそれぞれ発音します。また、リシンは「ライシン」、ロイシンは「ロイシン」と発音するので、集中しないで聞いていると聞



前列左から3番目が Dasgupta 教授、右から2番目が筆者
Dasgupta 研究室の集合写真（2017年4月7日撮影）

違えそうな気もしました。結局、アミノ酸の例をほぼ挙げてしまいましたが、今ではもちろん問題ありません。

さて、皆さんにとって、英語のリスニングを強化する方法は何でしょうか。とにかく誰かと話す、洋楽を聞く、教材を利用するなどが挙げられますが、強化法の一つとして、私はテレビ番組を利用しています。実はアメリカのテレビ放送は必ず英語の字幕が表示されます。それも若干遅れて表示されるため、正しく聞き取れているか答え合わせにもなり、リスニング強化に大いに役立っています。一方で、このリスニング強化でも全く歯が立たないことがあります。テキサスと言えば独特の訛りがあり、特に年配の方とお話すると、訛りがあるかなと感じることがあります。前出のアメリカ人英会話講師に聞いたところ、「僕でもテキサス訛りは聞き取りにくい。」と書いていたくらいです。

英語漬けの日々を送っていると、日本語を話す機会が貴重になってきます。4月には、アメリカ西海岸を中心に展開してきた日系のスーパーマーケットがダラス北部のプレイノにオープンしました。ダラスを含めた周辺都市では、日本語対応が可能な内科クリニックが開業し、日本でもおなじみの店舗等もオープンしています。恐らくですが、今年中にトヨタ自動車の北米本社がカリフォルニア州のトーランスからプレイノに完全移転するのがいい意味で影響しているのでしょうか。これらの場所で日本語の会話をすると、何かとても落ち着いた気分になります。

今回は酪農学園大学の中谷暢丈先生にバトンを託したいと思います。先生とは日本分析化学会 IC 研究懇談会で共に活動し、現在はタスマニア大学に Visiting Research Associate として在籍しているため、恐らくこのリレーエッセイ始まって以来、史上最長距離のバトンリレーではないでしょうか。海外出張中でお忙しいところを引き受けていただき、改めて感謝するとともに、先生のエッセイを楽しみにしております。

〔日本大学理工学部 吉川賢治〕